

其思想を問はゞ、祖先の遺業を繼ぐと云ひ、或は子孫のために闘ると云ふ。筆を弄するもの、口を弄するもの、凡て何か他のために盡す所あらんと盟はざるものはない。其盟ふ所實に好し。然るに更に彼等の心事と行動を調査すれば、其の口にする所と全く相反するものが多い。忠君愛國を唱ふる者に、非忠君愛國の行動多く、社會のために盡すと公言するものに、社會の秩序を阻害するもの少なくない。而して彼等が他を非難するの酷なると、狼の如く、他の過失を摘み出すことを求むること狐に似たり。彼等は兄弟の目にある物屑を視ること敏くして、己が目にある梁木を知らないのである。彼等は綿羊に來れども、内は殘狼である。人若し其術中に陥らんか、君子も忽ちにして不敬者と呼ばれ、志士も忽ちにして賣國奴に擬せられ、倫理學者は學問の自由を失ひ、歴史家も其研究の權能を擄奪せらる、我國民の最多數が自ら忠君愛國を偽裝して、狼りに他を不敬者視し、賣國奴視するは、恰も昔パリサイ宗の人々が自ら義人の假

面を被りて、狼りに神を瀆すものなりとの利器を他に向つて振ひしに似ている。嗚呼惡なる偽善者よ、敵娼の室に於て百金を收賄する教育家を以て、勅語の正當なる解釋者なりと思惟するか、金權と爵位を以て正義の人を殺さんと企つる政治家を以て、忠君愛國の資格ありと斷定するか。狡猾なる狼と狐よ、若し不義の金を貪り、不正の行をなすものが忠良の人民にして、正義を守る者が不敬者ならば、吾人は寧ろ不敬者となりて君王を讓らん。若し待合に於て淫歌を喜ぶものが愛國の臣民にして、教會に於て讚美歌を唱ふるものが賣國の人民なれば、吾人は寧ろ賣國の人民となりて國家を愛せん。妻を鞭ち妾に戯るゝものが英雄にして、圓滿なる家庭を造るものが小人なれば、吾人は喜んで小人となりて此世を終らんのみ。

嗚呼卑劣なる偽忠君者よ、偽愛國者よ、君等の外觀的行動は狼の禮服を着けたるが如し。偽裝なり、虚裝なり、不恰好の服裝なり。然れども吾人は君等の

禮服を非難せず、君等の猿たることを非難す。君等は禮服に恰當なる人にまで進化し得ざる動物にも非ざるべし。若し進化し能はずんば、猿に適當なる言語と舉動を用ゐよ。吾人は猿の口より忠君愛國の虚聲を聞くに堪へない。我國家の平安進歩を狼と狐とに一任することは出来ない。

國家の強國に必要なものは、高潔なる人格である。理想の社會を造るも、圓滿なる家庭を造るも、第一に必要なものは高潔なる人格である。故に高潔なる人格こそ皇室の忠臣、國家の良民、社會の紳士、家庭の孝子にして、彼の虚聲を振ひ、虚裝を纏ひ、虚威を示す所の偽忠君者、偽愛國者、偽紳士、偽孝士の如きは、之が頭上に唾しても尙ほ足らざるを感ずるのである。

十五、我文明の眞價

文明の中心點が地球の表面に於て移動しつゝ、事實は世界の歴史に趣味を有する

ものゝ均しく注目する所である、地中海近傍の文明が北進して歐洲北部の文化を生み出し、其分派が大西洋を横りて北米の新地に移植せられ、而して此移植せられたる新文明は母文明に劣らざる極度に達した、然るに又歐洲の母文明と北米の子文明は更に分岐して其餘勢を太平洋を隔てたる我國に及ぼし、此支川の文明も今や本川の文明と甲乙なき流勢を以て我國を濕ほしつゝある。

東洋に於ては印度に於ける古文明が枯死して、支那の文化を形成し、其文化が朝鮮を風靡し海峽を渡りて日本に來り、茲に母國以上の文明を産出するに至つた。希臘より左廻はりして來れる文明と、印度より右廻はりして來れる文明とが今日我日本に於て相握手するに至つたが、抑々此兩文明は長い年月の間各其進路を異にし、各特殊の氣候と風土と人情とを經過し其感化を受けて來りたるものなれば、茲に相對し相見るの日に於て双方の間に非常なる差異を現はすに至つた。

此兩文明が今我國土に於て二千年以來再び相會し相語り相交り、一致和合の實を擧げんとしつゝあるが果して其希望を達し得べきや、達し得べしとすれば、幾何の年月を之れに貸すべきや、又完全に和合し得たる彼の新文明は如何なるものなるべきか、是れ吾人が最も注意を怠るべからざる點である。

或程度までは、俗に云ふ舊文明と新文明、正確に云へば東洋文明と西洋文明とを既に我國に於て融合したるものである、建築の如き、衣服の如き、食事の如き、所謂和洋折衷のもの多く、交通機關の如き政治機關の如き、若しくは各種の實業政策の如きも亦和洋混合のもの少からず、單に外形上の觀察に止めば、我國は東西文明を見事に一致和合せしめて新奇なる一文明を完成したるが如き感なきにあらざるも、是れ外形上に於てしか見ゆるのみ、思想の根底に於ては尙兩者の間に甚しき懸隔あるを認めざるを得ず、外形の變遷が思想の變遷に先つことは凡ての事柄に於て見る所なれば、早晚我國民の思想上には今一層

の變化を來たすべきは自然の勢なるべしと思はる。吾人が今此に變化と稱するものは從來の日本思想を打破して其跡に西洋思想を注入するを注文するのでない、如何に極端なる親歐主義の人にては斯くの如き無謀なる意見を有するものなからず、我國民は物質的、外形的文明に對しても斯くの如き極端なる態度を取らざりき、況んや精神的文明に於てをや、唯從來の日本思想と稱するもの、中に至高の倫理的觀念に符合しないものがある、世界的道徳理想に背馳するものありとせば、吾人は是れをしも保持繼續せよと云ふの勇氣を有しない、之を變化して我國民性を一段高き所に引き上ぐるこそ愛國の至誠と云ふべきである。斯くの如き見地よりして今日の場合を觀察すれば、西洋人にして日本思想に學ぶ所もあるべく、吾人にして西洋思想を取るべき所もあるべく、斯くしてこそ我文明の眞價を高むることを得るのである、一も二も日本思想なりと稱して他を顧みないのは眞に日本を愛するもの、所爲ではあるまい。

十六、日本人の力量

日本人が世界の最大軍國に對して、未曾有の奇勝偉功を收めたりし事實は、
 常に日本人が軍國人民としての力量を表示せるのみならず、多くの點に於て充
 分の力量を有することを説明してゐるのである。今日の戦争は單に腕力の争に
 あらず、科學思想の應用である、義務觀念の實行である、一致共同の活動であ
 る。此等の諸力量は日本人の特に有する性能にして、之を軍事に應用すれば、
 軍事の成功を奏し、之を平時の事業に應用すれば、又た相當の効果を收め得べ
 きは事實に徴して明である、今日軍事上の成功を見て、日本人は戦争に妙なる
 も他の事には拙なりと早斷するは眞に日本人を解したるものでない。開國以來
 世界強國と對抗して自衛の道を圖らざるべからざるに至つたから、日本人は止
 むを得ず我有する凡ての力量を軍事上に注入して、自國の地盤を造つた、若し

日本にして、軍事に偏重したるが如き觀あらば、是れ日本の罪にあらずして、
 世界列強の罪である。若し開國の當時よりして、世界の列強が常に平和と正義
 を守り、日本をして武裝警戒の必要なからしめしならば、日本は自ら喜で海陸
 軍の爲めに莫大の金錢を費し、海陸軍の爲めに將來有望の青年を犠牲にするが
 如き愚を學ばざるべし。日本は必ず其力量を實業界或は精神界に注入して、
 今日戦争的技能を以て世界を驚かせし如き名譽を他の方面に於て收めしや必せ
 り。

個人としても、國家としても、各方面に自己の力量を平等に費し能はず、事態
 の輕重前後を圖りて、力量の注入點を動かさなければならぬ、今日我國に於け
 る宗教の不振を嘆ずるものあれども、元來日本人は或る人々の唱導する如く宗
 教に淡泊なるものにあらず、教會の維持、傳導の方策等に就て拙劣なるものに
 あらず、又た此等に要する經費を支出し能はざる程の吝嗇家にも貧乏人にもあ

らず。日本人が今日國家の維持と平和の爲めに對外戰爭に熱中せしが如く、精神上の利益の爲めに宗教の必要を感じたならば、彼等は優に教會或は傳道を經營するの力量と、又た之れに對する財政を整理するの實を示せしならん、日本人が力量の注入點を宗教に與ふるの時期に至らば、實に驚くべき宗教發展の實を世界の前に現はすに至るべし。軍事教育は之を外國に受けて今は外國の上であり、宗教教育も今は之を外國に受けつゝあるが、他日外國を凌駕して宗教上の一等國となるやも斗り難きなり、軍事に多忙なる日本人は未だ自己が有する力量を充分に他に應用するの時期を與へられないのである。

十七、所謂基督教徒

基督教徒と云へば、確實なる信仰を有し、堅固なる徳義を守り、且つ教徒としての義務を遂行すべきは勿論なれども、事實に於て悉く斯くの如きものゝみ

りと想像するは大なる誤謬である、歴史上用ひ來りし意義に於て、基督教徒と稱すべからざるもの、或は基督教徒たるの體面を有せざるもの頗る多い。斯くの如き現象は唯我國に於てのみならず、先進國たる歐米に於ても、屢々認むる所である、是れ或は基督教發展に伴ふ所の自然の餘弊なるべしとは云ひながら、發展の初期にある我國の如きは、大に警醒して餘弊の伴生を除去し或は豫防せなければならぬ。

近來我國の基督教界に於ける一異現象は浮浪教徒の出現である。即ち一定の教會に自己の教籍を置かず、あらゆる教會に出入して教を聞くもので、青年學生の中に其類多し。彼れ等は基督教の善良なるを知れり、而して之れによりて自己を修養せんことを欲せり。然れども彼等は教會に屬するの必要を知らず、又た洗禮を受くるの必要をも感せず、雄辯家の説教あれば、至りて聞く。演題の奇抜なるものあれば、至りて聞く。彼等は説教を聞かんが爲めに教會に行くも

ので、神を禮拜せんが爲めに行かず。故に聖公會の如き禮拜を重んずる教會には來らず、偶來るものあれば禮拜の央ばにして去るものあり、人若し彼等に其宗教を問へば、我れは基督教徒なりと答ふもの多し。彼等は一定の教會に屬せざるを以て、牧師の訪問に接する機會を得ず。秩序的の教養を受くる手段なく、説教或は演説に依りて得たる彼等の基督教は斷片的其督教に過ぎない。近來又卒業教徒と稱すべきものがある。洗禮の準備をなすまでには、大に聖書の研究に熱中し、洗禮を受ければ、既に卒業したるものかの如く思惟し、自然に聖書を読むことを怠る、聖書を読まざれば自然に信仰も冷却し、終には教會に入らず、事少くなるに至る。若し基督教徒が悉く受洗當時の熱心を維持したらんには、教會は幾倍の進歩を以て發達すべきに、實際に於て新陳交代の姿を呈し、著しき發達をなし能はざるは、所謂卒業教徒を出すの結果である。基督教の眞理は無限にして、人間の向上的生涯も無限なることを自覺せしめ、

受洗當時の熱心を終りまで持續せしむることを努むるは牧會事業の一要件であらう。

退隱教徒は教會の隱居である。年の老たるがためにあらず、教會に厭きたるが爲めに退隱したるものである。一時教會の爲め或は日曜學校の爲めに熱心に盡力したるものが、忽にして冷淡となり、教會に出席する事さへ怠るに至るは孰れの教會に於ても實驗する所であらう。彼等は墮落せるにもあらず、信仰を失へるにもあらず。又教會の事業に反抗するにもあらず、所謂退隱したのである。彼の歐米に於て白髮の老翁が十年一日の如く日曜學校の校長となりて忠實に奉事するが如き例の我國に少きは誠に遺憾とする所である。事々厭き易きは我國民の短所である、吾人は我國の社會に於ける隱居制度を廢せんことを希望すると共に、教會に於て隱居教徒の生ぜざらんことを希望するものである。社交教徒は平常教會に出入せず、唯親睦會等の社交的會合に出席するを喜ぶ、

殊にクリスマス祝會の如きは彼等の尤も喜ぶ所である。斯くの如き所謂基督教徒は固より健全なる基督的生活と云ふべからざるも、教會に對して大なる損害を與ふるものにあらず、彼の教會の内治を攪亂せんとする謀反的教徒常に教會の人物及事業を惡評する不平的教徒の如きに至つては、實に教會の發達を阻害する一大毒虫なりと云はなければならぬ。

十八、人生の目的

人が下等動物と異なる所以のものは、種々の理由あるべきも、其重なるものが二つある。一は下等動物の行爲は多く彼等が動物として有する本能に基つけども、人は一定の目的を立て、行爲の基礎とすることにある。一は下等動物は訓練し得べきも教育すべからず、人は訓練すると共に教育し得べきものである。前者の例を挙げんに、蜜蜂の巢を營むのは目的を以て營むのでなく、先天

的本能に依りてなすのである、人が家を造るは雨露を凌ぐてふ一定の目的を以て造るのである。後者の例を示さんには、前哨に赴く騎兵の馬は、訓練に依りて能く走り、騎兵其者は教育によりて能く其馬を走らす。此二つの區別を總合すれば、下等動物は本能によつて事をなし、或は訓練によりて之を使役し得れども、其性能を教育開發して更に高等なる動物となすことはできない。然るに人は將來に於ける利害得失を推考するの力を有するのみでなく、其性能を教育して行爲の目的を高尚明白ならしむることを得るものである。

然るに人の目的にも又た種々の區別があつて美術家の目的は極美にあるべく、學者の目的は真理にある。美術家の美に於ても、寫眞師の目的たる美と、繪畫家の目的たる美とは自ら區別あるべく、學者の真理に於ても、經濟の真理と心理學の真理とは一樣に見做すことはできない。然れども美術家と云はず、學者と云はず、單に人間としての目的を考ふるときは皆同一で、凡ての人間は美

術家にあらざるも、凡ての美術家は人間である。凡ての人間は學者にあらざるも、凡ての學者は人間である。故に人間としては美術家も學者も皆同一の目的を有すべきもので其目的は善と云ふに歸するのである。

人生の目的は善である。然れども其善に大小あり高下があつて、人間の價値は其目的とする善の如何に依て決定せられる。先づ其性質より云へば、最も卑近なる善は肉體に關することである。衣食住に關する快樂を以て惡とは云いず。之を無視するが如きは人生の道でない。然れども善としては最下級に置かねばならぬ。故に單に暖衣飽食を以て目的とするものには最も劣等なる價値を附せねばならぬのである。次は精神上的の快樂を目的とするもので前者に比すれば幾倍の價値を有するものである。即ち義務の遂行、家族の和樂、慈善或は報國を目的とするもの、如し。然るに此等は特別なる境遇にある人に取つて高尚なる目的と稱すべきも、其境遇を超越したる人生に於ては更に高尚なる目的がなければならぬ、即ち人間の最終目的は自他の靈格を發揚して、宇宙萬有の間に於ける人たるの位置を増進することである。

右は目的の性質上より觀察したるものであるが、又た之を時間の點よりして觀察すれば人間は進歩に伴ふて、目的の所在點を延長し、其長短によつて大に其人の價値を評定することが出来る。彼の野蠻人の如きは、行爲の目的は目前にあり、恰かも赤兒の泣くは目前母の乳房を慕ふにあるが如し。稍々進んで明日の事を計畫し、來年の準備をなし、尙ほ進んで、十年百年の後に結果を望むに至り、之を未來永遠に延長するに至つて、其人の志望目的は愈々其價値を増加するのである。

故に人生の最大目的は性質の上よりすれば性格の完成といふことにある。在天の父の完全なるが如く完全なることである。時間の上よりすれば永遠無限といふにあり、限りなき生命、限りなき喜樂是れ基督教の人生觀である。遠大の志

望高尚なる目的は其人を聖化す、聖化せられたる人格は神の寵兒で天國の嗣子である。

十九、信仰の内容

信仰と云へば一應單純なる心理的現象の如く見ゆるけれども、其實頗る複雑で種々の要素を含んでゐる。

第一の要素と稱すべきは其目的が必ず感應すべきものなりとの信念である、人文の劣等なる民族にありては金石を拜し植物を崇むるものがあつて意識の交通を期待し能はざるは明白の事なれども、是れ吾人の觀察で彼等の觀察でない、彼等は此等の無意識物に向て祈願をなすも、其祈願が必ず感應せらるゝものと信ずるや明かである、日を拜し月を拜するものも、或る意味に於て太陽に心あり、月に情ありと信ずればこそこれをなすので、此等のものに一點の感應なきもの

と知りたらんには所謂信仰なる觀念は起らぬ筈である。

次に信仰の目的たるものは自分に爲し能はざる所をなし得るものとの信念である、自分と同等なるもの或は自分以下のものに對しては信仰なるものは起らない、狐を信じ狸を信ずるものにも其狐狸が一種の力を有して人間を左右し得るものとの信仰を有するがゆへである、未開民族の信仰するものと文明人民の信ずるものとの間には大なる懸隔があるけれども、いづれにしても人間以上のものとして信ずるに於ては同一である。

次に信仰には必ず幾分の神秘的分子を含むるものである、人は自分にて自分の感情を悉く智識的に分析して説明することはできぬ、又信仰の目的物を全部自己の智識にて解釋することもできぬ、必ずや幾分の神秘的觀念を以て信仰を形成するものである、是れ即ち信仰と智識と異なる所で、如何に進歩したる宗教と雖ども此兩者を同一に視るものはない。若し信仰にして神秘的分子を取り去

られたならば、既に信仰の性質を失ふものと云ふべきである。
 又如何なる信仰も或る種類の條件を必要とするものである、生物を犠牲にするとか、作物を奉納するとか、我身體を苦しめるとか、其形式に於ては異なれども必ず或條件を満足せしめねばならぬとの信念がある、未だ曾て無條件の信仰なるものは世にない。

更に又た信仰は多くの場合に於て一種の利己思想を含むものと見てよい、單に信すべきが故に信するのでなくして、自己に或る物を得んが爲めに信するのである、必ずしも物質的或は肉體的の或物を意味するのでない、慰安を得んが爲め、幸福を得んが爲め、永生を得んが爲め、即ち何物かを得んが爲めに何物かを信仰するものである、是れ果して正當の信仰なるや否やは別問題として、人生の經驗に徴して明かなる事實である。

最後に如何なる信仰も之を告白する一定の外表的形式が有る、即ち禮拜である、其形式は其國民の習慣に依て異なるけれども、信仰のみを有して、之を發表する形式を有せざる國民はない。
 惟ふに此等の要素が高尚になればなるほど、信仰其ものも高尚となるもので國家の文野社會の進否は多く此等に依て判定せらるゝものである。

二十、新生涯

日に晝夜あり、年に季節あるは、人生の修養に好個の機會を與ふるものである。一日の失敗成功は翌日の警戒獎勵となりて新しき刺撃を與ふるが如く、一年の出來事は其成不成に拘はらず、翌年の新生涯を形成する原動たらねばならぬ。一年の始めに當つては人はみな過去を回顧して、其年の生涯を新にするの決心を養はんと思ふのである。

吾人が過去の生涯にして、若し成功の生涯であつたとすれば、吾人は其成功に

對して深く感謝の意を表すると共に、益々謙讓にして其成功を繼續するの意思を固ふせねばならぬ。成功は人をして高慢ならしめ易く安逸ならしめ易し。最後の成功を以て眞の成功と稱すべきものであるならば、一時に得たる成功の如きは、未だ全く我有として安心すべきものでない、之を繼續し、之を完成して以て好めて我有となるのである。物的成功に於いて既に然り、況んや靈的功に於てをや、過去の吾人が如何に祈禱に修養に成功したりとするも、之を繼續して吾人が品性の一部を形成するに非らずんば充分の靈格を發育することはできない。故に昨年の成功をして今年に繼續し又完成することは年の始めに於て吾人の決心を要することである。

過去の生涯にして失敗に歸せりとするならば、吾人は其失敗をして失望自棄に導かしめず、却て之を獎勵改進の動機とすべきである。事業の失敗を以て吾人は屢々時の不運、身の不遇に歸し、唯諦らむるの外なしとして自ら安ずることが

ある。是れ消極的の安心で、進歩の新生活を送るべき動機とはならないのである。抑々失敗には失敗すべき理由があるものであるから、其理由のある所を追究し、除去し得べきものは之を除去し、變ずべきものは之を變じ、以て新結果を來たすべき新原因を造らねばならぬ、過去の失敗をして將來の成功に變ずるには、動機を變ずるか、手段を變ずるか、或は動機と手段と共に變ずるかにあり、過去の失敗を経験したるものは、宜しく消極的の諦めに安んぜずして、積極的に之を考察せねばならぬ。

過去の生涯が誘惑の多き生涯なりしことを自覺し、將來に於ける靈的戰鬥の準備を新にすることも、亦た吾人が新年に於ける一の覺悟でなくてはならぬ、惡魔は過去の吾人に偵察を放ちて吾人の嗜好性癖を探り、或は知己親友に擬し、吾人に接吻して、吾人を賣らんとし、或は側面攻撃、或は間接射撃、或は正面突貫をなして吾人を惱すのである、吾人は一年又一年に戰鬥の經驗を積り來り

たりと雖とも、時には志氣沮喪したることもあり、時には殆んど惡魔の捕虜とならんとしたこともあつた。年の新なると共に勇氣に振興し、以て一年の戰闘に従事するの確信がなくてはならぬ。

過去の吾は無責任の吾なりしとは誰れしも懺悔自白する所であらう。吾人は爲すべきことを爲さず、爲すべからざることを爲したのである。時間を有益に用ひざりし、勞力を適當に與へざりし、金錢を最も有効に費さざりし、他人に不親切なりし、職務に冷淡なりし。是れ等は誰れしも年の末に於て懺悔せし所であらうけれども、懺悔と懺悔に伴ふ所の實を擧げねば、パリサイ宗の懺悔に外ならない。年の新なると共に、吾人は一層責任を重んじて、神の前に答へねばならぬ。

年毎に一段高く神に接近し、年毎に一層明かに神を見、年毎に吾人の生涯をして聖く高く向はしむるは、新年が吾人に與ふる恩寵である。吾人に取りて新年の芽出度所以のものは、形式にあらずして事實である。齡の一年を加ふるもの何の祝すべき事があらう、生涯の一層聖めらるゝこそ、人生慶事中の最大慶事と云ふべきである。

二十一、順境の心得

國亂れで忠臣出で、家貧にして孝子現はる。宗教の事に於ても然り、迫害に遭遇して始めて眞の信仰家を生ず、是れ吾人が歴史上に於て屢々發見する所の事實である。然れども眞の忠臣は國亂れて始めて忠臣となつたのでない、靜謐の時既に忠臣たりし人である、眞の孝子は家貧困に陥て始めて孝子となつたのでなく、幸福の時に於て既に孝子たりし人である、信仰の道も亦た然り平和の時代に於て堅き信仰あるにあらざれば迫害に際して泰然動かすべからざるの氣節を示すことは出来なう。

逆境は人間の道徳や信仰を造るものでなくて單に之を現はすに留まるのみ。然るに今日の青年輩が動もすれば故人の成功談を聞き或は冒險談を喜び、或は逆境に於ける志士の苦心談に心酔して殊更に奇行を肯てせんとするの傾向がある。或は殊更に逆境に投せんとするの傾向がある。是れ逆境は人物を造るてふ語を誤解したる結果で、青年の爲めに大に悲しまざるを得ない。恰かも游泳の術を知らないものが、人ありナイヤガラ瀑下を泳ぎ越せりとの奇談を聞いて、自ら投じて同一の奇効を收めんと欲するが如く、其成らざるは素より明かである。或は昔の學者は螢雪の功を積めりと聞き自ら電氣と瓦斯の使用をなし得るに拘はらず、殊更に雪を取り、或は螢を集めて讀書せんとすると均しく、愚と云はずんば狂と云ふの外はない。斯の如き異現象は獨り今日の青年輩が自己の事業に對して肯てする所なるのみでなく、基督信者の態度に於ても稍此傾向なきかを疑はざるを得ない、教會の

信徒が平時に於ては教會に入せず、教會の事業に興味を有せず、會費の負擔をなさず、教會員としての資格を殆んど失へるが如きものが、一朝教會に事ありと聞ては、忽ち起て其渦中に投じ、大に盡力せんとする。其志士振りは如何にも目醒しきものありと雖ども、斯くの如きは未だ眞の忠臣として許すことはできない。眞に教會を憂ふるの忠臣は平時に於て教會の忠臣でなくてはならぬ、順境に於て忠義を盡さないものは、逆境に於ても忠義の子たる資格を有せざるものである、我國民は元來變調を好むの惡僻がある、變調に處するの準備は必要であるけれども、特に變調を造らんとするに至ては頗る奇險なる性僻と云はねばならぬ、政治上に於て最も多く此性僻の弄せらるゝを見る、平穩なる語が殆んど平凡なる語に理解せらるゝに至つたのは實に悲しまざるを得ない、逆境に於て人を顧み給ふ神は順境に於ても人を恵み給ふ神なるを知らねばならぬ。

二十二、希 望

希望は人生を支配する最大動力である、人をして奮闘せしむるも、人をして勤勉ならしむるも、人をして苦難を忍ばしむるも、皆是れ希望の致す所である。保羅が希望を以て愛と信仰と共に、基督教の三大徳として論じたるものは是れが爲めである。

然れども、其希望の目的如何によりては、却て國民の精神を滅衰せしめ、個人の元氣を滅失せしむることがある。長く支那が依然進歩せざりしは、其希望の目的過去にありて、常に堯舜の治世を夢み、無爲の人民たらんと欲するにあつたのである。堯舜の治世とは單純なる初代人民の情態のみ。今日複雑なる文明的の事物は、彼等が希望する堯舜的の國家に毫も用ないのである。彼等が鐵道敷設を望まざりしも、科學教育を望まず、行政機關の完成を望まざりし

も、過去希望の中に養はれたる彼等の主義に反するからであつた。支那人民を文明に導くには、彼等の希望をして、過去より將來に轉せしむるのみ。猶太國滅亡の一原因も、亦た彼等が有する過去希望に歸せなければならぬ。彼等はアブラハム時代の單調と、ソロモン時代の文華を夢想し、現在の猶太をして過去の猶太に回復せんことを熱望した。彼等の周圍には希臘あり、埃及あり、羅馬ありし、此等は或事物に於ては孰れも猶太の先進國であつた。猶太は其國家主義の特長を拋棄することなしに、此等の異邦人より文明を輸入し得たのである、然るに固く鎖國攘夷の方針を探り、過去の單純なる時代に歸らんことを希望した結果、遂に其滅亡を來たしたりとするも、大なる誤りではあるまい。日本が東洋に於て獨り進歩發達する所以のものは、必竟するに其希望を過去に置かずして、將來に置くからである。日本が國門を開放して世界の文明を輸入したのは、現在の希望に満足せずして、將來の希望を有したからである。

基督教が世の文明を助長する所以のもの、種々あり。然れども將來に於ける明白なる希望を人世に與ふるてふ事實を以て其重なるものとす。個人としては失望者を慰め、落膽者を勵まし、失敗者を起し、彼等に永遠の生命を示し、無上の快樂を約するからである、國家としては正義を教へ、人道を説き、以て地上に於ける理想の天國を希望せしむるからである。

希望の目的必ずしも悉く其當を得たりとは云ふことが出来ないが、兎に角青年は多く希望の生涯を送るを以て、彼等には活氣あり、進歩がある。然るに老年に至りては、多く過去の記憶に生活し過去の經驗を語るを以て快樂とし、將來に於ける希望甚だ薄弱なるを以て、從て活氣を失ひ、進歩の實を擧ぐる能はず、吾人が屢々述べしことありし如く、老人が其活動社會を脱却するに至る理由としては、習慣の馴致、體力の衰弱に起因するもの多しと雖ども、心理的作用即ち希望の時代を経過したることも、又た或は其一原因なりと想像す

ることが出来る。故に外國に於ける如く老年者をして、死に至るまで活動せしむるには、舊來の習慣を打破し、體力を養成すると同時に、彼等に將來の希望を與ふるを要す、青年時代と同じく、矢張り希望の生涯を有せざるべからざることを示さねばならぬ。基督教は此等に向つて大なる責任を有するものである。

二十三、機會論

機會なるものは偶然に來るものにあらず、又無意味に來るものに非ず、來るべき時に來り、來るべき人に來るものである。人間の成功と不成功は多く己れに與へられたる機會を獲得して、之を適當に利用すると否とにある。

神は同一の機會を凡ての人に與へて恩寵に預からしめんとし給ふことがある、神が教役者を用ひて其福音を同時に多くの人に聞かしめ給ふ場合の如き是れで

ある、或人は之を受けて其恩寵を喜び、或人は之を斥けて其福音を喜ばず、是れ神に偏頗あるのでなくして、人に偏見あるの結果と云ふべく、選擇の自由を亂用して自ら滅ぶるものは獨りアダムに止まらず、アダムの子孫も亦然りと云ふべきである。

神は又同一の機會を凡ての人に與へ給はざることがある、甲に與へられたる機會と乙に與へられたる機會と全然異なることがある。是れ甲の爲めには甲の機會が最善にして、乙には乙の機會が最善なるべく、是れ神の聖旨にして、吾人は其與へられたる機會に満足して、之を失はざらんことを努めねばならぬ、人には政治家となるべき機會を與へられて益々政治的生涯に成功するものもあるべく、或は學者たるべき機會を與へられて益々學者の資格を發揮するものもあるべし、己れの機會を輕視し、他人の機會を羨望して、自ら不快を感じるが如きは、胸量の狭少なるを示すのみでなく、神の攝理を疑ふもので、基督を信

ずるものの有すべき心底でない。

神は必ず或る機會を人に與ふ。人屢々或事をなさんと欲して其機會なきを嘆ずるものがある、或は徒に機會を待つと稱して其日を浪費するものがある。人のなさんと欲する事業にして、神の聖旨に副ふ所の善事ならんには、神は必ず之を成すべき機會を人に與ふことを信じて疑はない。若し或事をなさんと欲して其機會の來ないことがあるならば、其事が其人に取て善からざるが故ならんのみ、又た機會を待つと稱して其日を浪費しつゝあるうちに、實は多くの機會が來りつゝある、而して之を失ひつゝある。是れ人の注意する所少きに依るものであるから、吾人は細心注意して一機會をも失はざらんことを覺悟せねばならぬ。

神は同一の機會を再び與へ給はず。今日なすべき機會を逸したならば是れ永遠に逸したのである、明日來るべき機會は新たなる機會で、失はれたる機會の復

活したるものでない。善をなすべき機會は日に新に吾人の周圍に群り來つて。吾人の注意を引つゝあるに拘らず、吾人が實際に之を利用するものは其十分一にも足らざるべく其九分通りは吾人の有とならずして通過するのである。遺憾の至りではないか。

神が人に與へ給ふ機會は悉く價値ある機會である。之を獲得したらんには、之を金錢に換算し得べく、之を事業の成功に見積り得べく、或は之を人生の救済に該當せしむることが出来る、之れに反して、一たび之を失つたならば、莫大の損失を來たし、或は自己と人とに無上の悲痛を起さしむることがある。商人が少年月にして幾萬の資産を造るも、或は一少時にして幾千の財を失ふも、多くは其機會を用ひると用ひざるとに依る、政治界に於ても宗教界に於ても、同一の原則に支配せらるゝものである。

吾人は斯く多くの機會、斯く貴き機會を與へられながら、之を失ひつゝあるは神の恩寵を失ひつゝあるものである。不注意、無思慮、傲慢、懶惰が知らず識らず、吾人より最も善きものを奪ひ去りつゝあることに心付かば吾人は更に大に警醒奮起する所がなくてはならぬ。

二十四、自然的生活

人の自然的生活に關して、説をなすものが二つある。甲者は曰く、人は自然に適應したる生涯を送らざるべからず、食欲の生ずるときに食し、睡眠を催すときに眠り、毛髪を切り或は性慾を制するが如きは、人が天然に有し、先天的に具ふるもの、要求を拒絶するものにして、人間本來の道にあらず、人は自然に生活し得べく造られたり。自然は人間に對して決して殘酷なるものにあらずと。乙者は曰く自然に生活するものは獸的生活なり、克己の生涯は自然に打勝つた生涯にして、人間にして始めてなし得べく、然し自然の勢力に放任せば、人は

滅亡するの外なかるべし。故に人間は始終自然に對して奮闘的生涯を送らざるべからず、奮闘の中に人は向上進歩するものなりと。甲者の曰へる如く、人は自然に適應したる生涯を送らざるべからざるは眞理である。然れども此生涯は慾望の要求するか儘に放任するの謂ではない、ストイツク學派は曰く生涯の至高善は徳である、即ち人間の行爲が自然法に一致するの謂で、人意と神意の合一に外ならずと。乙者の曰へる如く、奮闘的生涯を送らざるべからずと云ふも眞理である。然れども此奮闘的生涯は自然に對して奮闘するものでなく、寧ろ不自然に對して奮闘するものである。凡ての誘惑は人を自然的生涯より不自然的生涯に導かんとする所の勢力で、人の奮闘すべきは此勢力に對してである。人生の自然的生涯は向上進化すべきもので、苟も之を阻害し、或は破壊せんとする勢力は務めて之を除去すると同時に此向上的傾向を助長發展せしむるは即ち自然に適應したる最良の生涯でなくてはならぬ。人の生涯は恰かも石片を天

に向て投ずるが如し。引力が之を地に引かなければ、又た空氣が之れに抵抗しなければ、石片は投げられたる方向に向上進行すべきである、是れ投げられたる石片の自然的情態と云ふべきである。神の像に造られたる靈魂も神の許に走馳すべき自然の性質を有するものであるけれども、地上の誘惑は之を地上に落さんと欲し、失望落膽の空氣は其進行の勇氣を挫かんと欲し、終に其自然的方向を失して落墜せしむに至るのである。人の生涯は又た種子の生長するに似てゐる、生長するは其自然性で、枯死するは其自然性に反してゐるのである。人の向上するは自然にして、墮落するは不自然である。保羅は此自然的生涯を指して順性と云ひ、不自然的生涯を逆性と稱した。放逸遊蕩は不自然で克己犠牲は却て自然を全ふせんとする方法でなくてはならぬ。

人は生れながら神の子たる性能を有してをる。此性能は又た漸次發展して益々神に酷肖すべき力を有してをる。然るに人生の事實に徴するに此力は殺滅せら

れ、此性能は殆んど微弱となつて、人は生れながらにして悪魔の子にはあらざるかを疑はしむ。自然の神の子たるべきものが、不自然に悪魔の子たらんとしている。基督の事業は不自然に沈没せる人生を自然の情態に回復せんとするのである。而して之れが回復を圖るの道は直接に人生の害毒となるべき悪魔を滅すのでなくて、人生をして現存の悪魔に抵抗すべき力を養ひ以て自然の發展をなさしめんが爲めである。樹木の發育を妨げんとする暴風早魃を無くするのではなくして、暴風に耐へ、早魃に耐へて、生長し得べき強固なる樹木たらしめんとするのである。

困難辛苦の中に於て苦闘したる生涯は、無爲平凡の境遇に生長したる生涯よりも健強にして、高貴である、吾人の身邊を圍繞して吾人の自然的向上心を妨げんとする人生の苦痛をして吾人の精神を鍛錬し、心靈に研磨する所の好材料たらしめよ。

二十五、禮拜の對象

ハーバード大學のゼームス博士曰く、世界の諸宗教に於ける人世の經驗には、矛盾もある、衝突もあるが、少くとも次の二點に於ては悉く相一致するが如し。即ち人世の罪惡を認識すること、及び其罪惡より救済するには人世をして或る無限無量の力と正しき關係を有せしむることは是れなりと、此二問題は宗教の根本問題で、神學は實に此等に的當なる解答を與ふるの責任を有するものである。

無限無量の力とは何ぞ。何れの宗教も其存在を認むれども、其力の如何なるものなるかと云ふ問題に至つては其主張する所各異なつてゐる。或は曰く、此力は自然なり。自然は此力の發現なり。故に人の禮拜すべきものは自然の外他にあるなしと。是れ希臘羅馬の宗教で、山河草木雷電暴風悉く禮拜の對象で

あつたのである。或は曰く、神は萬有なり、萬有は神なり、人は無限無量の存在者の一部なり、人のなすべきは個人の特性を滅して、無限の神に歸着するにあり、大海に一滴の水を投ずるが如く、小我を大我に投じて自己の觀念を無くするにありと、是れ印度の宗教で、佛教も亦た此思想を有している。或は曰く無限無量の力は不可解なり、推理も觀察も其眞理に到着する能はず。之を知らんと欲する程愚なかるべし。人生は宜しく人倫五常の道を守れば可也。人間以外の天地を討究するの必要なしと。是れ儒教の眞髓なるが如し。是等の思想は今日の西洋にも往々見る所で、第一は科學教、第二は宇宙教、第三は倫理教と稱すべきか。

此問題に對する猶太教の解答は全く前の三者に異つてゐる。猶太教は曰く神は人の如し。人は神の如し。自然にもあらず、宇宙にもあらず、又た全く不可解にもあらず、神の正義仁愛は人の中に其微影を見る。舊約書の記者は神を以て山花草木に諺喻を取らず、民を治むる帝王、羊を牧する牧羊者、子供を愛撫する親に譬へたり。神を探すに天に登るの必要なく、海を潜るの必要なく、過去に遡るの必要なく、將來を思ふの必要なく、神は今人の中にありといふ。ヒュイマニチーを通じてデイビニチーを見る可きである。

イスラエルの人民は斯くの如き思想に於て養はれ又た生長したのである。而して此イスラエル人民の間に基督は生れたのである。基督の始めて社會に出でしや、其崇拜者は之を以て一のラビとなし、漸くにして豫言者となし、終にメシヤと信じ、基督に就て神國の教理を學びしのみならず、此神國の設立に關して基督に多大の望を馳した。然るに三年の後基督は十字架に賤しむべき死を遂げたから、彼等は忽ち失望して一時其信仰をも失つたが、基督の復活と共に彼等の信仰も復活し、且つ其觀念を全く靈化せしめたのである。

猶太教は人の中に神の像を見るべきことを教へたが、基督の教は基督の中に神

を見ることを教ふるのである。如何となれば、神の子にして又人の子なる基督は神を示すべき最も完全なるものであるからである。基督の聲は神の聲であつた。基督の働きは神の働きであつた。基督の意思は神の意思であつた。基督自ら己れを説明して曰く、我を見るものは父を見しなり。父我れに在り我れ父に在り。父と我れとは一なりと。爾來殆んど二千年、凡ての物は變遷進歩せるに拘はらず、獨り基督の生涯は超然として以前の處にある、而して凡ての人の理想となつてゐる、ナザレのイエスは時間と場所を超越したる偉人である。故にジョン、スチユアード、ミルすらも、耶穌基督の生涯よりも更に高き標準を見出すことは容易ならずと云ひ、アーネスト、レナンも、未來の事情は如何に變化するとも、耶穌の性格に優るものは起らざるべしと叫んだ。此人格に依りて顯はれたる無限無量の方が即ち吾人の禮拜する眞の對象と云ふべきである。

二十六、建徳の二面

建徳に二面あり、消極面の建徳と、積極面の建徳とである。共に人生の完成に缺く可らざるものである。消極面にのみ力を盡して積極面に意を注がないものは、器を潔くするを知りて、之を用ふることを知らざる如く、積極面に熱心なるも消極面を忘るゝものは、玉を琢磨せずして、其光澤を得んと欲するものに似てゐる。此兩面は相反するものでなくして、相扶くるものである。唯之を成すに順序がある。消極的建徳は積極的建徳の準備である。信仰の働きある前に先づ悔改の實がなくてはならぬ。之を愛する前に先づ人を憎まざるものとならねばならぬ。基督の垂訓は神を愛せよと云ひ、隣を愛せよと云ひ積極的の働きに重きを置き給へることは其特色とする處である。若し世の人突然に之を聞きたりしならんには、或は直ちに之を受くるの難きを感じ

たるやも量り難い、然るに世は基督の準備をなして居つた。時満ちて基督は世に來り給ふたのである。然らば其消極的準備をなしたる基督以前の道德説は如何。

一、イスラエル、モーゼの十誡中九誡までは消極的建徳を獎勵した、「エホバの外なに者をも神とする勿れ」、「偶像を造り之に跪伏し事る勿れ」、「エホバの名を猥りに云ふ勿れ」、「安息日を聖として忘るゝ勿れ」、「なんぢの父と母とを敬へ」(積極)「殺す勿れ」、「姦淫する勿れ」、「盜む勿れ」、「虚偽の證左を立つる勿れ」、「隣人の家を食べる勿れ」、何々せよと云はずして、何々する勿れと云ふ。舊約時代の修徳は多く此類にして、施洗者ヨハネに至つて其極に達す、彼は天國は近かり悔改めよと云ふ。悔改は消極的建徳の最も必要なるものである。

二、支那、孔子曰く己の欲せざる所之を人に施す勿れと、己れの欲する所を以て之を人に施せと云ふ基督の理想に達するには、先づ第一着歩として此孔子の

の金言に達せねばならぬ。

三、希臘、デルフイ神殿の格言「汝自身を知れ」是れソクラテスが常に青年を導きたる要旨である。消極的修養の起點、實に此處にありと言ふべきである。人は先づ自己の缺點、性癖、惡徳、無學を知り盡さねばならぬ。斯の如く、古代に於ける三大文明國はモーゼと孔子とソクラテスを通じて消極的建徳の必要を教へ以て基督の準備をなしたりといふべきである。

二十七、愛の引力

物質界と精神界とを問はず、宇宙の事實に最も大なる職分を盡しつゝあるものは引力である。先づ之を物質界の現象に徴するに、小にして結晶體の構成、細胞の組織、大にして天體の運行、地球の體形、皆引力の結果である。宇宙の事物が各々其位置を保ちて整然其秩序を紊さざる所以のものは之がためである。

これを人生の事實に徴するも亦然り、親子の情愛、夫婦の和合、朋友の親睦、孰れも道徳上の引力に依りて成る、親は子に引かれず、子は親に引かれずば、親子の關係は既に絶えて唯二人の他人を見るのみ、夫婦朋友の結合も亦然りである。臣、君に引かれずんば愛國の念は生ぜず、人其隣に引かれずば慈善の心は動かない、社會は徳義の引力によりて其組織を強固にするものと云ふべきである。天國の事實も亦引力の事實である。基督預言して曰く、我もし地より擧げられなば萬民を引きて我に就らせんと、基督の十字架は靈的引力の大動源である。基督に引かるゝ事に依つて、人は天國の臣民となり得るのである。十字架の引力は凡ての引力よりも強く、我よりも父母を愛む者は我に協はざる者なりと、父母の引力も子女の引力も十字架の引力に及ばない、十字架の引力より我を引き離し得るものは誰ぞやとは保羅が自ら問ふて自ら其ものに非らざるを答へた、艱難も辛苦も、迫害も、入牢も彼れを十字架より離すことは出来なかつた。子、

親に背ても、親、子に背ても、十字架の力に背くことは出来ない。抑々斯くの如く強烈なる靈的引力の本質は果して何ぞ、基督の愛である。愛は力である、最も大なる力である、愛は敵をも引きて之を同化する力がある。十字架に掛けられたる基督は、無限の愛を以て萬民を引き、其性格を變化する所の一大動力となつた。

二十八、宗教心の三要素

渺々たる大海の中央に横はり、巍峨たる山岳の絶頂に佇立して宇宙の宏大なるを觀るときは自ら無限の勢力に觸れて、全能の神に拜事するの念を生ずべく、燦爛たる星辰、馥郁たる芳花を眺めては、自ら神の榮光を讚美するの念を起すべく、國家の興廢、人生の浮沈に鑑みては、自ら神の攝理の下に跪伏するの思あらしむるに至るは人間自然の情より發する向上的觀念である。

暗夜人なきの時、病床枕重き時、其他種々の逆境、種々の悲運に遭遇せる時、人は自ら自己を研究す、自己の弱點、自己の無能、自己の過去、自己の罪惡、心中に往來して殆んど煩悶に苦むことがある。是れ亦た人間自然の情より來る自省的觀念である。然るに間を逆境非運に陥れるの人、孤獨頼るなきの人、飢寒に苦しめる人、不具廢疾に惱める人、厭制虐待に遇へる人、嫉妬或は誤解を蒙れる人を觀るときは自ら同感同情の念を生じて之を救濟せんと欲するに至る、惻隱の心は人の天性に基くのである。人間の同情心は必ず弱きものに向て起る、吾人は之を愛他的觀念と云はんと欲ふ。

仰上の觀念、自省的觀念、愛他的觀念之を宗教心の三要素とす、ホッヂス博士は人は時としては「ルック、アップ」(上を觀る)、時としては「ルック、イン」(中を觀る)、時としては「ルック、アバウト」(周圍を觀る)するものなりと云つた。之を三要素と云ふ、共に宗教心に必要なる分子であるからである。人に仰上の觀

念あるが故に人は神を禮拜す、ゴシック式の會堂が特に天に聳ゆるが如き態度を表すのも、會堂のチャイムが天に訴ふる如き音調をなすのも、會堂のバイブオルガンが崇嚴の譜を奏するの、向上的宗教心の發表である。此等を以て單に虚空なる儀式なり、舊風の建築なりとのみ評すべきではない、上を仰ぐの心は凡ての物をして上に向はしむ、美觀と宗教觀とは相一致するものにして、美術は宗教を助け、宗教は美術を聖化したる事實、又た聖化したる事實は歴史に於て明白である。然れども建築と音楽を以て、宗教心の全部を満足せしむるものなりと解してはならぬ。

基督は天國は近けり、悔改めよと云ひ給ふた。天國を得て然る後悔改むるの必要があるのである。悔改めて然る後天國を得るのである。碎けたる靈魂に非らざれば、神の聖意に適ふものとはならない。故に反省的觀念は宗教心の發達したる後に於ても他の觀念と共に常に活動しなければならぬ。彼のリバイバルの如

此觀念の一時に發動したる結果に外ならない。ソクラテスが「爾自身を知れ」との語を以てアテンスの青年を教養したるは智識上の事なりしも、之を今日宗教上の説教として、實に適切なりと信ずるのである。

悔改には悔改の結果がなくてはならぬ。信仰には信仰の實行がなくてはならぬ、結果なき悔改は眞の悔改でない。實行なき信仰は死せる信仰である。愛他的觀念は反省的觀念より生ずる自然の結果である。愛他心は義務心よりも寧ろ同情より來るのである。同情とはアダム、スキスの云へる如く他人の苦痛を見て自己の苦痛の如く感ずる所の性情である。故に同情は性情を同ふする人と人との間に起るもので、人以下或は人以上のものに對して充分の同情を與ふることは出来ない。人は禽獸に對して充分の同情を與ふることが出来ないやうに、神は神として人間に充分の同情を有することは出来ないであらう。是れ肉體をとり、人となり、我臍の間に降り給ひし所以である。悔改は他人に對す

る同情の念を深うせしむ、慈善事業の如きは其結果なりと云ふべきである。此三要素を圓滿に又充分に發達せしめて以て眞の宗教を得べく、一面を重んじて他面を顧みざるは健全なる宗教ではない。

二十九、我事業

人には我事業と稱するものがある。神より我れに授けられたる特別なる事業にして所謂天職なるものがある。神は人の分量に應じて事業を與へ給へば無業無職の人の存在すべき理由はない、無職業の人は此世に存在する權利はない。聖書の中にある旅人が出發前に其所有を三人の僕に預けたる譬の如き、又た貴人が遠國へ行く時十人の僕に十斤を與へたる譬の如き皆人に事業がある、而して其事業は神の授け給ふものなるを示してゐるのである。此我事業なるものは、如何なる困難にも苦痛にも勢力にも誘惑にも打勝ちて成し遂げねばならぬ

もの又た打勝ちて成し遂げ得らるゝ性質のものである。如何となれば、神は人に成し遂げ得られざる事業を興へ給はないからである。我事業は人の眼に小さき事業、賤しき事業なることがある。然れども神の前には神聖なる事業である。我事業は神の榮を顯はす爲めの事業で人の譽を得る爲めの事業でない。芳名を竹帛に垂れずとも忠僕の名を天の記録に存すれば十分である。業成りて天父の名を顯はすが人の目的たるべきである。神は非常なる手段を以て我事業を黙示し給うことがある、或は静かに且つ嚴かに人の耳にさゝやき給ふ事がある。然れども聖靈なる神は人の精神を強制し給はず、人の自由を壓束し給はない。聖靈は導く神にして強ゆる神でない、神が我事業なりとして示し給ふとき、之を受けざるは父の意思に背く所の不忠なる者である。

我事業にあらざる事業には成功しない。若し眞に成功せば是れ即ち我事業たるを示すものである。然れども成功なるものゝ標準は容易に判定することはでき

ぬ。忠實なる役者が信者を得る能はざるを以て不成功と云はれぬ、世には播くものあり、蒔ぐものあり、穫るものあり、穫るものを以て成功者とは云ふべからず、敵に向つて勝利を得るものは、獨り軍人のみにあらず、軍人を生みし母、教へし人、皆其成功を分取すべきものである。我事業は手を袖にして自ら來るものでない、神は求めざるものには興へ給はないのである。自ら助けざるものを助け給はない、求めよ然らば興へられ自ら助けよ、然らば助けられん、我に事業なしと云ふ勿れ、自ら求むることの足らざればなり。我事業を撰ぶに當り注意すべきもの三つあり、始めよりして非凡なる事をなさんとする冒険心或は好奇心より出でてはならぬ。是れ其一である。徒に人の事業を摸倣してはならぬ、人の事業は特に其人に屬するもので我事業でない。故に其人には成功たるも我には失敗たることがある、是れ其二とす、始めより目的の事業全部を知らんと欲してはならぬ、唯知るべきは目的に至るの方向である、方向を誤ら

なければ即ち可し、我事業を撰ぶに當り參酌すべきもの四あり、一は時代と場所の必要、二は自己の能力と體力、三は社會の關係、四は自己の嗜好である、神は人を時代と場所の中に置き、社會的關係の世に生れしめ、之に腦力と體力と嗜好を與へ給ふた。此等を満足せしむべき事業は我事業たるを證するものと知て可ならん。

既に我事業を撰で而して之に従ふに當り、瞬時も忘れてはならぬことは我事業は神に關係ある事業なりと云ふ觀念である。神より離れたる獨立の事業は成立しない「我なんちの榮光を世に顯し爾の我に委し所の行は我これを成せり」と云ひ得るを以て我事業の最終目的としなければならぬ。

三十、人格論

人格なる語は近世の流行語である。演説に著書に屢々用ひらるゝ所の語である。

然るに多くは人格の修養或は人格の開發等を説くのであつて、人格其ものは如何なるものなるかを説くものは少ない、偶々之れありとするも哲學者の云ふ意味と法律家の述ぶる意味とは同一でない、全體此熟語は昔時より傳はれるものでなくて、近頃に至つて新造せられたる語であると思ふ。日本の新造語は概して外國の或語に該當せしめんが爲めに出來たものであるが、人格なるものは何の譯字なるか、是も一の問題である、キヤラクターの意味にも見へるし、インデビデュアリチーとも取れるし、又パーソナリチーに解しても宜しき様である。予は最後のパーソナリチーの意味に取り度いたのであるが、茲に一の困難がある。ドイツアイン、パーソナリチーと云へば神の人格となり、ヒュマン、パーソナリチーと云へば人の人格となる、甚だ不都合なる譯字であると思ふ。人格の人が必要なる文字である、さりとて神の格、或は人の格と云つては口調が悪い、神格或は人格と云へば多少耳ざはりが宜い様であるが、然る場合には

單にパーソナリチーを心格と譯したれば如何がと思ふ。即ちキャラクターを性格に、インデIVIDユアリチーを個性に、パーソナリチーを心格に譯すること、せば、幾分文字の意味を明瞭ならしむるに近からんかと思ふ。

人格即ち予の所謂人の心格とは人の心理状態である。肉體或は境遇の如何に關係する所はない。體格體質の如何に依て人格の高下は分らない、或は社會上の位置勢力等は無論人格の價値に影響するものではない。然らば如何なる心の状態を以て人格の高きものとし、如何なるものを以て人格の卑しきものとなすか、言を換ふれば人格の價値を判定すべき心の内容は何であるか、之れを知ることが最も肝要である。

第一の要件は意識の統一である。此統一を缺ける證明として極端なる例を擧ぐれば發狂者の如きものである。發狂者の多數は心の凡ての作用を錯亂せるものではない、或特殊の事柄に就て異狀を呈するものである。平生の挨拶には何の異なる所なき人が、商賣上の事に話が及べば忽ち不得要領の事を言ひ出すの類である。即ち意識に統一を缺いて居るのである。予が外國留學中に一の殺人事件が大評判となつたことを今に記憶して居る。或人二人の子供を持ちしが、何の意味もなく、兄の子供を殺して、裁判所に引き出された、彼れは判事の訊問に答へて、弟の子は平素非常に愛して、衣食にも不自由なからしめ、學資も充分に與へて學問をさせて居るが、兄の子は憎い、何の理由もないが唯憎い、之を殺して鮮血淋漓たる有様を見た時ほど生來愉快な事はなかつたと述べた。當時の新聞紙はいづれも彼れを以て道德觀念に異狀を有する一種の發狂者と評したのであるが、即ち意識の統一を缺けるものにして、人格の完全ならざるものと云ふべきである。

今日にても、一方に於ては非常に社會改良や慈善事業に熱中する人にて、他の一方に於ては妻子を虐待し、父母の孝養を怠るものがある。或は公人として

は忠實に其職務に盡し、公益の爲めに一身を犠牲にするをも避けざる人が、私人としては、家庭を亂し徳義に背く行爲のみを肯てする人もある。是等は精神に變調を來したる人にして、よき人格を有する人とは云はれない。

人の心には智情意の現象がある。之を平等均一に發達せしむることは甚だ難い事であるが、しかし餘りに一方に偏したるものは意識の統一を缺けるものと云ふべく、人格の價値を落すものである。深き學問上の智識はなくとも、普通常人の有すべき道德上の判斷力は人格の一要素である、然し之れに伴ふ感情なきときは、他人の迷惑を何とも思はぬ、他人の心配も更に氣に掛けず、自ら罪惡を犯さずとも、又た進んで他に同情を表すべき行動もとらず、冷酷なる頭腦で、理屈一片の人となる、斯くの如き人を見て誰れも高き人格を有する人とは評せぬであらう。又感情は如何によいものにも、是れのみにて世の中は渡られぬ、是れのみにて高尚なる人格を造ることも望まれない、情に脆い人は兎角常

識に乏しいのである。進んで事はなすけれども失敗が多い。此邊の調和が大事である。意思の働きも同様に智識と感情と相提携して共同的行動を取らなければならぬ。人の性質に依りて幾分の特長は無論許すべきであるが、極端に偏重して人格上の不具者とならぬ様に注意するの必要がある。

次には徳の調和であるが、是れも今日の人間には完全に實現することは殆んど不可能である。然し今日の人間としてなし得るだけの調和を企圖するは必要であらう。曩きには公人としての徳と、私人としての徳の調和を述べたが、公人としても種々の徳があり。又私人としても數々の徳がある。誠實、勤勉、忠愛、忍耐、仁愛、正義等の諸徳は公私の差別なく、いづれも人に必要なものであつて、高尚なる人格は此等を調和統一して圓滿に發達せしめたのである。正義の徳は固より賞すべきものである、然し之と同時に仁愛の徳を失はぬ様に心掛けねばならぬ。誠實の徳は誰れにも無くてならぬ素質であるが、唯誠實のみにて勤勉

もなく忍耐もない様では矢張り道德的不具者である。此點に關しても人に各特長あるべきは勿論なれども、一の徳あれば他は顧みるの必要なが如く思ふのは、善良なる人格を造つたものとは云はれない。忠實なる懶惰者、不義理なる慈善家、虚言を吐く愛國者、表面だけの忠孝者など云ふものは、一の徳は皆備へて居るが、他の不徳が名詞となり、又形容詞となりて之れに結付くに至つては賤むべき人格を表出するのである。

動機と手段の一致が人格の價値に大なる關係を有して居る。何事を爲さんとするにも、其動機の善良ならんことを要するのである。所謂グード、インテンションにて、人の道德行爲に最も必要なものである。善良とは絶對的に善良なるものと云ふにあらず、其行爲者の考にて善良なりと思ふものを云ふのである。斯くの如く、自ら以て善良なりと斷定したる動機に依てなしたる行爲は、實際に於て善良ならざりしとするも、行爲者の人格を損するものでない、大石以下

四十六人の義士がなしたる行爲に關して、後世の人が如何に批難を加へても、又實際に批難すべき點ありとしても、彼等が當時に於て最も善良なりと判定したる動機に基づきし以上は、彼等の名譽は依然として存すべきである。

然し目的が如何に善良であつても、之を成し遂ぐべき手段を選択するに當りて善良なるものを取らずとせば、矢張り人格に缺く所ありとせねばならぬ。是らは前と同じく、自らは善良なる方法と思つても、實によろしからぬ事もあるべし、斯る場合には道德上の責を受くる次第でない。目的は手段を正しからしめない。目的は目的、手段は手段である。善良なる人格を有する人には此二者が共に一致して善良なるものである。

最後に人格は繼續的でなければならぬ、一時唯善良なる丈けでは賞すべきでない、又一部善良なる丈けでも賞すべきでない、是れ等は其なされたる一時、或は一部の美だけは無論美にして賞すべきであれども、之を以て其人の人格を美

なりと云はれない。今日は忠臣であつて、明日は逆臣となる如き、其忠臣と云はれたときの忠義は賞すべき徳であるが、繼續しない。故に其人の人格は悪と云はねばならぬ。人格は道徳的意識の習慣性を要するものである。氣苦しく感せず、自然に善事をなすものである。悪をなさんとするには却て苦痛を感じる人である。故に平生善良なる人が偶々不善に陥ても其不善は不善に相違ないが、其れが新しき不善の習慣を造らざる限りは人格の價値を回復することは容易である。之に反して平生悪事をのみなす人が偶々善事をなしても、其善事は善事として見るべきも、之れが直に人格の善良なるものとはならぬ。基督教の所謂新生命と云ふものは、悪しき舊習慣より善き新習慣に移つたものを云ふのである。

然らば理想的人格とは如何なるものであるか、我々は何を理想として己の人格を進めねばならぬか、即ち人格修養とは如何なる意味ぞ。前に述べたる通り、凡ての意識が統一に凡ての徳が調和して絶えず向上進歩する事を務めねばならぬ。基督教は人間の理想的心格を基督に於て示して居る。基督の教を聞て之に従ふのみが基督信者の目的でない、其心格に同化られて、我人格を向上發展せしむる事が更に大なる目的である。

三十一、基督教倫理の理論的方面 (一)

基督教は元來宗教にして倫理ではない、然れども、宗教は人間と社會とに最も密接なる關係を有するものにて之を廣義に解釋すれば、何事にも宗教に關係を有せざるものなく、人生の浮沈、國家の興廢も之を宗教的に解釋し得べく、空の鳥、野の百合花も之を宗教的に觀察することができ。されば昔のイスラエル人民には、宗教の外に政治もなく、法律もなく、又た文學もなく、宗教其者が即ち彼等の政治、法律、文學であつたのである。今日のヒンヅー人民に於

ても然り、彼等が固守する社會階級も日常の習慣風俗も、悉く宗教に基しないものはない。我基督教に徴しても、一時は政治も宗教と合一し、哲學も宗教の奴隸となり、美術も殆んど宗教の器具たりし時代あり、宗教と政治、宗教と哲學、宗教と美術とが分離併存するに至りても多くの社會事業或は教育事業は基督教の名に依て經營せられた。

然るに今日にては他の極端に陥るの傾向を示し、以前宗教に専属したりし救濟事業の如き、政府が政權を以て之を行ふに至り、宗教と教育とは兩立すべからざるものかの如く誤認するものすら現はるゝに至つた。

極端に宗教と他の事柄とが混同することは殆んど無意味であるけれども又た極端に此兩者を分離することは殆んど不可能である。基督教を宗教として考ふるとき、如何なる範圍まで侵入すべきか、如何なる事柄まで容喙すべきか、又た如何なる事柄は基督教的に説明し能はざるものか、此等の點を明瞭に考察して

然る後に基督教と他の出來事との接觸點を確定せねばならぬのである。例せば數理に關するものゝ如き、如何に之を基督教的に説明せんと欲するも不可能である。基督教三角術とか、基督教電氣學とか、或は基督教地震學とか云ふ科學の存在を許さない。然るに政治、社會等の事柄に關しては、宗教が幾分の接觸點を有することを認めねばならぬ。政治の全部と社會の全部とが悉く宗教的にあらずとするも、宗教が人生の事實なる以上は、其間多少の關係を認めねばならぬ。故に基督教社會學なるものありとすれば、即ち基督教が社會に及ぼせる勢力及び感化等の研究と見ることも得べく、或は基督が社會を如何に觀察せられしかを研究するものと見ても可い。更に一步を進めて、倫理問題に至ては、宗教との接觸點愈々多く、宗教との關係益々緻密なるを見る。宗教も倫理も共に人間の品性と行爲とに關するものにして、畢竟するに宗教とは倫理に或者を加へたるものである。其或者が即ち宗教をして宗教たらしむる所にして、之を

滅除すれば、宗教も一の倫理となり了る。故に基督教倫理なるものは、基督教に包有せらるゝ倫理分子の研究にして、常に興味ある問題なるのみならず、有益なる問題なることは論ずるまでもない。

基督教と倫理とは斯くの如き親しき関係を有するものなれども、基督教は固より倫理系でない。聖書は固より倫理書ではない。故に普通の倫理書に於て發見する如き倫理的秩序を聖書の中に發見することはできない、故に基督教の倫理思想を組織的に研究するには、基督教の教訓、談話、行動等より歸納して、一の系統を作らねばならぬ。更に困難なことは、基督教に於ては、人と人との關係を以て、神と人との關係より割出されたるものとす。神學思想と倫理思想とは離すべからざる關係を有し、單獨に倫理系を組織せんとせば、礎石を云はずして、家の構造を講釋するものと均しかるべく、到底満足なる研究ではない。故に基督教倫理は飽までも宗教思想を加味したる倫理なることを忘れてはならぬ。

凡そ倫理學に於て考究すべき問題は、大要左の如く分類することが出来る。

- 一、善とは何ぞ、
- 二、何故に之を善と云ふや、
- 三、如何にして之を善と知るや、
- 四、何故に善を爲すや。

昔時より今代に至るまで、倫理學者の議論が種々に分れたのは、此等の諸問題に關する意見の衝突に外ならない。又た倫理學の組織が各々其趣を異にせるも、此等の諸問題に關して、其高調する所均しくないからである。基督教も其倫理の方面よりして、此等の問題に解答を與へねばならぬ。

善とは何ぞや、との間には二つの意味を含有する。理論的善と實際的善とである、理論的善とは終極の善、至高の善、最大の善、絶對の善など、稱するもの

にして、以前より快樂説を唱導し、自然説を主張し、完成説を立論するものは皆此理論的善の研究に外ならない。實際的善とは智仁勇とか、仁義禮智信とか、信望愛とか、或はプラトンの四徳の如き、モーゼの十誡の如き、日常の行爲に關するものにして、基督の教訓中にも、此等特殊の場合に於ける、特殊の善に就て述べられたるもの頗る多い。此二種の善の間に關係あるは固より明かなることなれども、今予が述べんと欲する所は、實際的善にあらずして、理論的善である。即ち基督教は此最高の善に就て如何に説くものなるやと云ふことである。

基督教は、此最高善を、三の方面より觀察してゐる。神學の意味に於ては、神を以て最高の善とす。基督が或る青年に答へ給へる語に「一人の外に善者はなし、即ち神なり」とあり。即ち絶対に善と稱すべきものは神のみである。抽象的の理性或は理想にあらずして、性格を有する神なりと云ふことである。基督

教に於ける凡ての宗教的觀念。全く神を以て絶対の善とする此最大觀念に基けるものと云ふても可い。

社會的意味に於る至高善は天國である。人の要求すべき最大目的である。山上の垂訓中に「爾曹まづ神の國と其義とを求よ。然ば此等のものは皆なんぢに加らるべし」とあり。舟中の垂訓中に「天國は好眞珠を求めんとする商人の如し。一の値たかさ眞珠を見出さばその所有を盡く賣て之を買なり」又た「天國は畑に藏たる寶の如し、人みいださば之を秘し喜び歸り其所有を盡く賣てその畑を買ふなり」とあり。此等の垂訓に依れば、人が凡てのものに先ちて、又た凡てのものに優りて、又た凡てのものを犠牲にしても、要求すべきものは天國である。

個人的意味に於ける終極の善は永生である。基督曰ひ給へり、「凡て我名の爲に家宅あるひは兄弟あるひは姉妹あるひは父あるひは母あるひは妻あるひは子あ

るひは田疇を棄る者は百倍を受かつ窮なき生を嗣ん」と。約翰傳第三章十六節に「それ神は其生たまへる獨子を賜ほどに世に人を愛し給へり此は凡て彼を信する者に亡ること無くして永生を受しめんが爲めなり」とあり。故に其獨子たる基督は約翰傳第十二章五十節に「神の命じ給ふ所は即ち永生なるを我しる」と述べ給ふた。保羅は此精神を知れるを以て、神の賜は我儕の主イエス、キリストに於て賜はる永生なりと説いた。此等の語に徴すれば、人が個人として要求すべき最終の目的は所謂永生なるが如し。

斯の如く倫理上の最大善として三種の方面を發見すれども、畢竟するに此三種は觀察の方面を異にしたるものにして、其實質に於ては全く一に歸するものとなるべし。天國とは神の意思が完全に衆多の間に行はるゝ情態を云ひ、永生とは神の意思が完全に個性の上に行はるゝ結果なれば、神と云ひ、天國と云ひ、永生と云ひ、神の性質を中心としたる思想なりと見て可い、故に善とは何ぞと云

ふ問に對して、基督教は絕對善は神なり。相對善は神の意思に適へる凡ての品性と行爲なりと答へることが出来る。

三十二、基督教倫理の理論的方面 (二)

基督教に於ては神を以て絶對の善とし、是れより凡ての倫理的思想は發展したるものなるが、是れは寧ろ神學の部に屬すべき問題にして、單純に人間の倫理問題として考究する場合には前述に於て論じたる他の二大觀念、即ち天國と永生を以て最大善と認めねばならぬ。社會善の最も大なるものは天國にして個人善の最も大なるは永生である。

次に提起せらるべき問題は何故に天國と永生とを以て善となすやと云ふことである。宗教上より云へば單純に基督がしか云ひ給ふが故なりと云ふを以て満足し得らるれども、倫理學上よりは其等のものが何故に善なるを説明せんこ

とを要求するのである。

天國と永生との内容と實質を云へば心靈的の最大幸福なりとせねばならぬ。人は皆出来るだけ多くの又た大なる幸福を得んことを切望する。此求幸福は人の天性に基くものにして不幸不快は人の自然に避けんと欲する所のものである。唯基督教に於て人生の要求すべき幸福なるものは、肉體的快樂にあらず。又た必ずしも精神的満足とのみ云はれない、固より肉體的快樂と精神的満足とを比較すれば後者の前者に優れることは勿論なれども、更に貴きものは心靈的の幸福である、即ち靈魂の快樂である。基督教に於て犠牲或は克己と稱するものは一面苦痛を意味するが如くなるも、畢竟するに心靈的の幸福を得んとする手段たるに過ぎない。全身完了して地獄に行かんよりも、不具にして天國に行くに若かずと云ふは是れを意味したるものである。

天國及永生の實質及内容に就ては基督も充分に説明し給はなかつた。然れ

ども一は社會の最大幸福、一は個人の最大幸福を意味することは疑はれない。常に消極的に苦痛或は疾病の缺乏を意味するのみならず。積極的に平和と喜樂を意味するものである。故に神が其獨子基督を世に降し給ひしは、之を信ずるものに此最大幸福なる永生を與へんが爲めであつた。

斯の如く基督教の善は心靈的性質のものなれば、人が享受し得べき善は客觀的に存在するものにあらずして、主觀的に存在するものである。基督教の善は之を他に求めて得らるべきものにあらずして、之を己れの心中に求めねばならぬ。凡て物質を以て罪惡なりとするは當らず。物質は善にもあらず、惡にもあらず、善惡は心にありて物にあらず。

天國と永生とを以て人生の最大善とすれば、日常の品性行爲に對しても、之を基礎として其善惡を計量せねばならぬ。之れに到達せんとする品性及行爲は凡て善にして之に遠ざからんとする品性及行爲は凡て惡である。故に善にも大

小優劣あるべく、悪にも又た大小優劣あるべし。保羅の所謂信仰と望と愛の如きは其最も大なるものにして此中最も大なるものは愛である。天國と永生を以て最大善とし、之に到達し或は隔離せんとする品性及行為に向て善惡の判断を下すものとすれば、人は如何にして或行為は此目的に達し或行為は之れに反するものと判定し得るや。語を換ふれば、人は如何にして善を知るや。是れ隨て起る問題にして、倫理學の人性問題である、基督教は人を以て元來神の像に依て造られたるものなりと信ず。即ち元來神の性質に類似したる性質を有するを以て先天的に神の意思を知るの力を有す。天國と永生を得るは神の意思を知つて之れに服従することである。此神像性は倫理學者の所謂良心と稱し道德性と稱するものにして、保羅は之を内なる人と唱へた。然るに此先天的神像性は未だ充分に發展しないのである、肉體的情念の爲めに壓抑せられたるを以て、明白に天國と永生の眞理を曉ることが出来ない。基督は此

眞理を教ふる爲めに來り給うた。基督の降臨は人間心靈の一大進化である。人は之れに依て、人の要求すべき目的、到達すべき理想、向上すべき人生を解釋するに至つた。故に基督教に於ける倫理問題は先天的に賦與せられたる神像心を發揮すると共に天啓に依て與へられたる聖書を知ることである。

倫理上の所謂善とは何ぞ、何故に之を善と云ふや、如何にして之を善と知るやの三問題に就き、基督教の立脚點より其概要を述べたれば、今は最後の問題、即ち人は何故に善をなすやてふ事に就て一言すべき時に達した。

昔希臘の倫理思想に於ては、人が眞に善と知りたることは必ず之を爲し、眞に悪と知りたらんには必ず之を避くるものとし、實際に於て人が爲すべきことを爲さず、爲すべからざることを爲す所以のものは、其爲すべきこと、爲すべからざることを知らざるが故なりと云つた。即ち知と徳とを同一視したるものである。然るに基督教倫理時代に至て、此思想に一大變化を來し、知徳必ずし

も同一にあらざ、悪魔も神を知れり、而して悪魔の行は何時までも悪魔の行なりとは聖書の主張である。保羅は羅馬書に於て「わが行ふ所の者は我も之を是とせず、我願ふ所のもの我これを行はず、我惡む所のもの我これを行ばなり」と云ひ。神像性を有する人間は、或程度までは神の聖旨を知り、且つ之を行はんと欲すれども、「われ願ふ所の善は之を行はず、反て願ざる所の惡は之を行へり」と保羅は告白した。人既に自ら願ふ所の善を行ふ能はずとすれば、如何にして善を行すやとの疑問は愈々起らざるを得ない。

基督教は他力教である。自己以外、寧ろ自己以上の方に頼りて、自己の爲し能はざる所を爲すものなりとなす。基督嘗て葡萄樹の譬を設け自己と信徒との生命的關係を説き最後に、「もし爾曹われを離るゝ時は何事をも行し能はず」と云ひ給ふた。故に保羅は腓立比書に於て「我は我に力を興るキリストに因て諸の事を爲得るあり」と云つた。其他神の裕助と云ひ、聖靈の指導と云ひ、何れも

人の善をなし得るは自己以上の存在者の靈的誘導啓發に依ることを意味せざるはなす。

凡て人間の肉體的生命は、他の物質の補助を受けて生存し、又た成長するが如く、人間の精神的生命或は心靈的生命も、孤立して生存し、又たは成長し得るものでない。必ずや他の靈的感化誘導に依らねばならぬ。自ら善を知りて、しかも之を行さずと云ふが如き、智識と意思との不一致を意味するものにして、之を一致せしむるものは自己以外の力なりと云はねばならぬ。偉大なる人格が微少なる品性を薰陶し得ることは、人と人との間に於ける事實である。而して其人格の大なる程又た其薰陶力の大なることも事實である。然れば基督も「我れ擧げられなば萬民を引て我れに來らせん」と預言し給ふた。基督教徒の實行力は、實に基督なる自己以外の方に依りて養はれたるものと云ふべきである。斯くの如く徳の實行は外部の力に依ると雖ども、或ものは此力を受け、或もの

は此力を受けざる點より見れば、徳行の一原因は又た自己にも存在することを認めねばならぬ。此主觀的原因を稱して信仰といふ。基督教は信仰を以て客觀的感化を受くべき價なりとしてゐる。即ち神と其子基督を認知し、之れに信頼することである。基督或煩悶せる父に向て「爾もし信する事を得ば、信する者に於て爲あはざる事なし」と云ひ、又た其弟子に向て「我まことに爾曹に告ん、もし芥種の如き信あらば、此山に此處より彼處に移れと命とも必ず移らん」と云ひ、又た「爾曹もし芥種一粒ほどの信あらば、此桑樹に抜て海に植れと云とも爾曹に従ふべし」と云ひ給ひたるは、如何に信仰の力あるかを示しているのである。

ソクラテス及び其以後の希臘哲學者が、無限の力を與へたる智識に代ふるに、基督は信仰を以てし給ふた、基督教倫理の主要は斯くの如し。彼の實際的方面に於て、各種の關係に涉れる道德思想の如きは、更に論述するの機會があらう。

三十三、性格の養成

人間の價値は其性格にあり、學問も財産も爵位も官等も之を性格なき人に渡さば害毒の材料とならんのみ、無學も貧苦も無爵無官も性格ある人の價値を滅滅するものではない、彼の學問あるが爲めに虚榮に耽り、爵位官等あるが爲めに傲慢なるものは禍なるかな。理想の天國は性格の天國である。現世に於て紫袍と細布を衣て日々奢樂める富者は腫物を患ひ門前餘屑を乞ふラザロと未來其位置を轉倒してゐる。彼は性格なきの富豪である。此れは性格あるの貧民である。性格を以て唯一の條件とする天國に於ては紫袍も細布も腫物も破裳も更に關係する所ではない、嗚呼禍なる哉社會の偽善者よ、爾曹は白く塗たる墓に似たり、外は美装を示せども内は骸骨と諸の汚穢にて充てり、學問財産必ずしも無用なるものではない。爵位官等今直に廢止するの必要もあ

るまい、此等を運用するの人のして、高激なる性格を有するものであれば人生の福祉を増進する媒介となるべきや明である。先づ求むべきものは天國と其義とである即ち神聖なる性格である。

性格なき政治家は權力の争奪を是れ事として益々國家の政治を混亂するのみ、性格なきの實業家は私利私慾を目的として公利公益を思はず、性格なきの官吏は自ら虚名空榮を貪つて人民の幸福を顧みず、性格なきの學者は其學問を害用して無邪氣の人民を殘害す。性格なきの教育家は教育事業を以て商業と同一視し、己れの利益を圖るを目的とす。性格なきの學生は墮落す。性格なきの軍人は亂暴す。性格の欠乏は實に亡國の根底である。

借問す幾百の帝國會議員我國民を代表して公平無私の協賛を與へ得べき神聖なる性格を有するや否や。十數ヶの交際國に駐在せる十數人の大使、公使、數十人の書記官、數十人の外交官補、數十ヶ所に駐在せる數十人の領事、數十人

の領事官補は果して我日本を代表して恥づる所なき神聖なる性格を有するや否や。一萬以上の陸軍士官、戦時六十萬以上と稱せらるゝ我軍人果して我國の運命を擔ふべき性格を有するや否や。幾十隻の軍艦果して性格の人によりて運轉せらるゝや否や。全國十二萬の教育家（小學教育より大學教授に至るは）性格の養成を重んぜるや否や。全國五百二十萬の生徒並に學生（小學生徒より大學生に至る）は適當に其性格を養成せられつゝあるや否や。吾人は此等の間に應じて直ちに然りと斷言する能はざるを悲しむ。

性格の養成は個人修養の上よりも、國家經綸の上よりも急務中の最大急務とせねばならぬ。性格の完成は人間の至善にして社會の理想であるからである。之を措て而して人生問題或は社會問題を解釋せんと欲するは、抑々本末を誤れるものと云ふべきである。

性格を以て人世に最も價值あるものとするれば、如何にして之を養成すべきかは

従て起る所の問題である。今善良なる性格の發達を助長すべきものと思考し得らるゝものを列擧すれば、

一、法律の制裁 法律の力は少くとも消極的に性格を建設するの一助となる。即ち法律は善良なる性格に違反する較著なる行爲を防止する爲めに多少の功あるは論を待たず、又アスの如き行爲を防止すると共に其行爲の本源たる性格を矯正するに於て多少の功あるは明かである。今文明の程度を同うせる甲乙二國ありて甲は公平にして整然たる法律を有し、乙は更に法律なるものを有せず、何事も國民各自の隨意に任すとすれば、性格を破る所の犯罪事實何れに多きやと云はゞ甲國に少くして乙國に多きは人の豫期する所であらう。法律は文明の或程度に於て最も必要なるものである。不文野蠻の人民は法律を有しない。文明の極度に達したならば又た法律を要しないであらう、然れども、進歩の路程に於ては法を設けて人生を警戒し或る行爲を防禦するの必要がある。

然れども、法律は重に消極的に人を保護するもので、積極的に人を指導するものではない、且つ其制裁を與ふる範圍に於ても最も較著なる事實に止り隱微なる行爲或は内部の思想に至ては直接に其感化を及ぼすことはできない。故に法律の制裁は性格養成の上に助力を與へ得ないが其助力たるや頗る微弱なるものである。

二、禮儀の規定 禮は他に對して善き感情を與ふる所の動作である。善良なる性格と禮義とは必ず相隨伴するものであるから、禮を修めて以て品性を造らんと欲す。是れ支那に於ける從來の修養法なるが如し。水が方圓の器に従ふ如く外部の形體を正すれば内部の實體亦た從て正しかるべしとは支那學者の主張である、故に洒掃應待よりして日常の起居或は服裝に至るまで嚴格なる規定を造つた。我國に於ける茶の湯、插花其他女禮式の如き單に一の技術と見做すべきものではない。必ず精神修養の一助たることを信ず。西洋に於ける社交法と

稱するものでも單に交際の方法とのみ見てはならぬ。自ら精神的教育をなしつゝあることは疑ふことが出来ない。法律は社會に現れたる較著なる行爲のみに關するけれども、禮法は家庭に於ける瑣末の事に至るまで規定してゐる。法律は消極的に此事をなすべからずと云ふ、禮法は積極的に斯くの如くなすべしといふ、性格の修養法としては、禮法の却て法律に優る所あるやうである。然れども禮法も亦た法律の如く益裁修養たるに過ぎない。形體の美を修めて以て實質の美を求む、無益なりとは言ふべからざるも充分の効果を奏せざるは事實に於て明かである、居動姿勢賞すべきものにして性格の賤しむべきもの世に鮮からざるは否むべからざる事實である。

三、倫理教育 正當なる倫理教育が前二者に比較して性格の養成に力あるは明かである、倫理は法律の言はざる所を言ひ、禮法の教へざる所を教ふ、倫理は人として有すべき至高至大の目的と之に到達すべき方法を明示する、倫理は人

として日常守るべき本務を命令する、吾人は智徳合一論を主張するものではないが、智が徳を助くるものなる事を信ずるものである、性格の墮落者は教育ある人よりも教育なき人に多き事は事實の證明する所である。

然れども倫理教育も亦た性格の建設に充分の力ありと言はれない、人は爲すべきことを爲さず爲すべからざることをなしつゝあるを自覺するものである、智識を以て人生を指導し得るならば醫者に疾病なく學者に不徳なき譯である、然るに事實に於て然らざる所以のものは智徳は如何なる場合に於ても合一するものにあらざる事を示すものである。

肉によりて生るゝものは肉なり。靈によりて生るゝものは靈なり。是れ性格養成の基本的主義を示せるものである、性格を養ふには性格を以てせねばならぬ。偉大なる性格は小性格を感化する力がある。家庭に性格修養の力ありとすれば父母の教訓よりも父母の性格の力による。學校に於ても然り、社會に於ても

然り、教會に於ても然り、明友の交際に於ても然り、前に述べたる法律禮法倫理等凡て性格の養成を助けざるものはない、然れども最も力あるものは高尚なる性格を以て之を導くことである。

基督は人生理想の性格である。人格と神格と基督に於て一致してゐる。基督の性格に觸れて自己の性格を改善せるもの豈獨りガラリヤ漁夫のみならんや。我れ十字架に擧げられれば萬民を引て我れに就らせんとの豫言は事實に於て應じたのである、又た應じつゝあるのである、英雄としての性格、學者としての性格、其他或職務又たは位置に對しての性格に就ては、古來尊崇すべき人がないではない、然れども單に人としての性格即ち人の人たる所以の品性を圓滿に現はしているものは基督に於て始めて之を見るのである、彼れは男性の理想たると共に女性の理想である、彼れは空前絶後の性格を地上に發見したる神の子である、非凡なる性格を有する人は死後尙ほ其感化力を失はない、況んや死し

て而して尙ほ死せざる基督は其偉大なる性格を以て萬民を引つゝあるのである。基督の感化力は此にあり。基督を以て過去の人のみせずして現在の人とすることにあり。基督を以て猶太の小天地を奔走したる志士とのみせずして、心靈世界に存在する神子とするのである。故に吾等基督に住り基督亦た我等に存すとは基督を信するもの、實驗する所である、二つのもの相接するときは其弱きものが強きものに同化せらるゝは自然界に於て屢々目撃することである。假令へば鐵片の磁氣に於けるが如し。性格同化の理法も亦た之れに異ならない。基督の性格に觸るゝものは基督の性格の如きものに化する所以にして人としての資格を完成するものである。既に人としての資格を完ふせば其人の位置に關する特殊の義務は適當に履行せらるゝに至るであらう。

基督の性格に化せらるゝには自己を適當の地位に置かねばならぬ、近く接すれば接する程感化力の度が増加し、長く接すれば接する程感化力の量の膨脹する

のを感じる、近く接し長く接して自ら誤らなければ性格の同化必ず期すべきである。

三十四、紳士道

世界の國々は、其國の歴史或に習慣に依りて特殊の氣質を有して居る。其氣質は即ち其國の精神ともなり、骨子ともなりて居るのである。我國にては從來武士道なるものがあつて、切腹をするも、敵打ちをするも、何をするも、此道を基礎として割出したのである。武士の顔を立てると云ふことが無上の名譽であつて、武士の道に背くと云ふことは甚だしき恥辱であつた。そこで此武士道の爲めには生命も捨てた。財産も捨てた。妻子も捨て、父母も捨てたこともある。それ等は至極嘉すべき事としても、時としては、此武士道を立つる爲めには、偽りも言つた。放蕩もした、妻子の貞節も破らせた、一言すれば武士道の爲め

には、自己の生命、財産は勿論、自己の人格、道徳をも犠牲にしたるのみならず、妻子の人格道徳をも犠牲にした、目的さへ善良なれば、方法は何でも構はないと云ふ道徳律を實行した。今迄の日本は是で宜いとしても、此後の日本は是れでは行かぬ。武士道の意義、應用を餘程變せねばならぬと思はれる。米國には平民道と云ふものがある。華族もなければ士族もない。人間は皆平等であつて、言はば皆平民である、力量があり、手腕があり、人格があれば、世人の信用も受け、賞讃を博するのである。是れが人間の眞の道だと考へて居る。米國の如き歴史を持つた人民には是れで宜しいが、日本には適用が出来ない。昔時よりして一種の階級があつて、今更之を打破することは出来ない。又打破する必要もなからふ。さらばと云つて、印度の階級道を眞似する理由もない。印度に於けるが如き階級制度が行はれては、人間の向上發達はとも行はれない。米國の如き平民道も、印度の如き階級道も共に我國柄には合はぬ。我國の

人爵制度を改めたからと云つて、我國民の性格が善くなるものではあるまい。支那人の氣質は商人道である、官職も賣買する、妻も賣買する（或地方では）。何も彼も金錢本位であるから、支那人は金儲が上手である。我國民に此商人道を採用せしめては如何と云ふものもある。我武士道は餘りに金錢上の事に淡泊であるから、少しは支那人氣味を加味するも富國強兵の基となるかも知れぬが、官職妻子を物品同様に賣買する様になりては甚だ險呑である。獨逸人の頭腦は學問道に固つて居る。うまい事を考へる、うまい議論を吐くのである。彼等は三度の食事を二度にしても學問したいと云ふ氣風がある。近來の日本人も随分學問道には耽つて居るが、併し獨逸人は一般に、三度の食事は三度やつて學問する餘裕あれども、日本人の多くは、惜いかな三度の食事を實際二度にせなければ學問することが出来ない、時には一度にして學問したいが、それも出来かねる人もある。そこで賣淫して學問する女學生もあるとの事、日

本人に此上尙ほ學問せよと勸むる必要はない、昔の武士道に倣ふて、賣淫しても學問する。親を饑渴に陥れても自分は學問すると云ふ傾きさへあるのである、我日本人が、全體何事を爲すにも、手段の選擇に注意せぬのは、武士道の與へた一面の弊害ではなからうかと思はれる。武士道の缺點を補ふ唯一の道は、英國の所謂紳士道である。武士道なる文字に愛着して、之を捨つるに忍びぬとならば紳士的武士道と云つても宜しい。兎に角我國民が將來に於て大に學ばねばならぬものは紳士の道である。殺伐、殘酷、破倫等の分子を取去つた武士道である。紳士とはゼンツルマンと同意味に解釋したのであるが、偕其ゼンツルマンとは如何なる意味であるか、之には種々な解釋が與へられてある。ウエブスターは其第一義として、ゼンツルマンとは家系の正しきもの、第二義として、禮儀を守り且つ品性正しきものと云つて居る。スタンダート字彙には、第一義として、

禮儀ありて人の尊敬を受くべきもの、第二義として、如何なる人にてても行の正しきものとして居る。ブラックストンは、國家の法律を學び、常に大學に出入して學問を好み、更に勞働を爲さざるものは人之をゼンツルマンと云ふと述べた。チヨースターは、汝の前に德行温良の人を見たらんには、其人假令高貴なる門閥を有せざるも、之をゼンツルマンと稱し得べしと云つた。サッカーは、正直、温良、博愛、勇氣、智慮を有し、且つ此等の徳を最も優美なる方法に於て實行する所の人をゼンツルマンと信じた。ラスキンは、他人に好感を與ふべき姿勢を有し、他に同情を分つべき思想を有する人であると説いた。或は世の人を、紳士らしき紳士と、紳士らしき非紳士と、紳士らしからざる紳士の三種類に分つた人もある。

概して云へば、紳士とは、正直にして同情に富み、人に對しては寛容なるべく己れの性格を完うし、義務に忠實なるべく、其上言行動作の卑しからざるもの

を云ふ。英國の子弟は、家庭に於ても、學校に於ても、紳士たるべく教育せられて居る。であるから社會に出で、は勿論のこと、學生時代に於ても、言語も正しく、舉動もよろしく、誰の前に出ても恥しくない態度を持つて居る。學生だから御免と云つて、直にあぐらを組んだり、お菓子のつまみ食ひをやつたりするやうな不作法を演出しない。日本の武士道は正義の觀念に厚く、犠牲の精神に富んで、誠に宜しいが、英國の所謂紳士道に現はる、徳義を缺いて居る。此二つのものを合して一つの國民道徳律を造つたら如何であらうか。單に日本紳士道と云ふことに毛嫌ひがあれば、紳士的武士道でも、新武士道でも差支ない。

三十五、今日の基督教

題して今日の基督教といふもの、決して基督に種類あることを意味しているの

ではない。「昨日も今日も永遠變らざる」ところの基督に依りて啓示されたる教理は亦た永遠變らないのである。然れども其教理を解する人の智識は進歩し、其教理に接する社會の情態は進歩するものゆへに、假令同一の真理たりとも時と場所とによりて大に其光色を異にす、斯る意味にて昔日には昔日の基督教あり、今日は今日の基督教が有る。歐洲に於ける彼の宗教改革とは如何なる事かと云へば從來の僧職的基督教が個人的基督教に變じたる事實を指すもので言を換ふれば神と人との和合は必ず僧職の仲保によらずとの觀念となつた、故に此時期は個人的思想の最も盛なる時で自己を潔ふして神に近より又た自己を正しくして神に交らんことを務めたから、此時期には多くの熱心なる祈禱者、純潔なる信仰家を生み出した、然れども其祈禱も信仰も自己といふ觀念の上より來りたるものであるから、苟もすれば隱遁主義を取り厭世觀を持するものさへ現るゝに至つた。十九世紀に至り物質的文明の進歩と共に人類に關する新知識、

社會に於ける新思想は從來の宗教界に又た一刺激を與へた、以前は眼を閉ぢ胸を撃ちて自己の罪を悲み只管に神の救を得んことを是れ務め、殆んど他を顧みるに違あらざりしが今は眼を開き手を廣げて人間の社會に注視し自己は唯其社會の一分子なることを認識した、以前は神は父なりとの觀念を重んじたるが今は神は父なる故に人は皆兄弟なりとの觀念を併せ重んずるに至つた、故に今日の基督教は即ち社會的基督教なりと云ふて可い、固より僧職的時代に個人的思想なしとは言はず、又た個人的時代に社會的觀念なしとは言はず、然れども社會の歴史に於て人心發達の傾向を観察すれば右の如き區別をなすに於て不當ではあるまいと信ずる。

今日の基督教は社會的である、社會的でなければならぬ、社會的なるが故に物質を擯斥せず、又た現在を輕視せず、社會とは諸ての關係より生じたる境遇を云ふものであるから物質も其中にあり、現在も其中にあるのである、基督の目

的は心霊界をして全く物質界より分離せしめんとするのではない、物質界が心霊界に服従して天の榮光を顯はさんが爲めである、人の靈魂をして其身體を離れて保存せしめんとするのではない、身體に貫通して神聖なる器とならしめんがためである、人間の救済とは社會の境遇と全く隔離して隱遁出世の生活をなさしめんとするのではない、世にありて世を聖化せしむる責任をも附帶せしめん爲めである、永世を與ふとは常に來世の生命を與ふといふに止まらない、永生は窮りないのである、故に現在も將來も窮りなき時間の中に含有しているのである、教會の存在とは一種特別の團體を社會外に成立せしむるの謂ではない、芥子種となりパン種となつて擴張發達して其活潑なる生氣を其周圍に賦與せしむるの義務を有するのである、故にパウロは神の聖意と基督の天職とを論じて曰く「父すべての徳を以て彼に満たしめ其十字架の血に由て平和をなし萬物すなばち地上に在るもの天にある者をして彼に由て己を和がしむる事は是を

の聖旨に適ふことなり」と、基督の Atonement は At-one-ment にして一致和合の義である、神と萬物とを一致和合せしむるの義である、即ち宇宙萬有をして聖意に合同せしむべき大事業を成さんために基督は此世に來り給ふた、此大事業の完成したる時は即ち天國の設置せられたるときである、基督の Redemption とは神の聖旨に背戻し其玉座より離散したる萬物を收拾誘導して世の創始より神の攝理にある所の一致に復歸せしめんとすることである、然るに萬物に關する此大事業を帯びたる基督が殊更に人世の救済に汲々たりし所以のものは他なし、人は萬物の靈長にして萬物之れによりて支配せらるゝからである、進化論にせよ、創造説にせよ人は宇宙の發達に於て最後に現はれたるもので唯に靈性のみならず、智識に於ても、意識に於ても、最大の力を有するものであるから、人が神の聖意に一致するの必要あるは勿論、萬物の一致和合も此人によりて成就し得らるべきものであるからである、故に人を救済するは萬物を救済するこ

は終に其極處に達した、神と基督は一である、夫れ故に其兩意識は共に存して互に衝突せず、基督の望み給ふ所は神の望み給ふ所である、神の聖旨は基督の聖旨である、基督は自ら此の如き大思想を以て世に來り給ふた、此人世に對する基督の大目的は如何と云ふに、基督は己を信する者の爲めに父に祈りて曰く「父よ爾われに在、われ亦なんちに在る、かくの如く彼等も我儕にありて一にならんため、かつ世をして爾の我を遣し、事を信せしめん爲なり、爾の我に賜し榮を我かれらに授けたり此は我儕の一なるが如く彼等も互に一にならん爲なり、われ彼等に在、なんぢ我にをる蓋彼等をして一に全ならしめ且世をして爾の我を遣し、こと又たなんぢの我を愛する如く彼等をも愛することを知らしめんと也」と左すれば基督の社會觀はイエスキリストを首石とし諸ての人類が一致和合し、神の聖旨を尊ぶことである。

神が夙とにイスイエル國民を選出して之を養成し給ふたのは唯彼等の特寵し給

ひたのではなくして、來るべき基督の準備をなさしめんためであつた、基督が十二の使徒を選給ふたのは皆に彼等が信仰を受け給ふた恩賞の稱號ではなかつた、彼等が萬國に至り諸ての人に福音を宣傳せしめん爲である、パウロはコリント人に書いて曰く「一切のもの神より出つ、かれキリストに在て世と己を和がしめ、且つ其和がしむる職を我儕に授く」と云へり、故に先に和を得たる我儕は後にあるものを導て神に和を求むるの責任を有するものである。

愛なる一大動力によりて諸ての人間が一致和合し、其和合體が又た基督を首石として愛なる天の父と和合し、茲に一大王國を建設することを目的とするのが社會的基督教なることは右に述べた通りである、而して此王國は心靈的統一にして形體的國體でないことは勿論のことである、人間は種々の關係により又た種々の目的を以て異なる社會を造れるものであるから、王國の建設は此等を滅盡して一種特異の社會を創造するのではなく、唯此等が潔められて各其團

體の性質に従ひ、神の聖意を學び、或は之を行ふことである、フリマンツル氏は此くの如き團體を八つに分けた、一、教會、二、家族、三、學校、四、美術會、五、社交會、六、商社、七、國家而して第八は完全なるヒュマニチーの結合にして前の七團體は皆な第八に抱括せられ、第八の發達を助くるものとした、教會は最も直接なる使命を帯びたるもので、其祈禱の大目的は爾の聖國を來らせ給へといふことである、洗禮の大主眼は人をして神の愛に依りて結ばれたる天國の嗣子、ヒュマニチーの同胞體に加入せしむることである、晚餐の聖奠は管に個人が基督の死を紀念する爲めに止まらず、其犠牲的精神を人類の間に現實ならしむることである、其他教會に於て爲すべきこと皆社會的の意を含まないものはない、家族は諸ての社會情態の分子を含有するもので、完全なる家族は一小天國である、眞の祈禱は多く家族團樂の裡に於て捧げられる、智識の始めは愛母の膝下にあり、美感の初發は子供の玩弄物にあり、故に潔められたる

家族は諸ての社會に其好果を與ふるものである、學校の制も亦たこれと同じく其目的は神聖なるもので、無限にして靈なる神の攝理の幾分を物質界に定むるの手段に外ならない、故に或る意味にて、教師は牧師なりといふことが出来る、美術會の如きも亦た然り、美といふことは神の性質の一部であるから、術によりて美を發揚することは、禮拜の一種と云ふて可い、故に美感は即ち一種の宗教心と云ふことが出来る、社交も宗教的である、社交は犠牲より成る、最高の犠牲は基督で、之を認識し又た之れを社會に現出するに至りて理想の社交は得らるゝのである、商業は社會的關係を教ゆ、人間の勞働を教ゆ、物質界を心靈界に服従せしむる方法を教ゆ、同情同感を教ゆ、國家も亦た然り、其形態に於ては共和政治なると君主國なるとに關せず、國家存在の目的は國民の安寧を保護し幸福を増進することである、基督教化せられたる國家は其國體を變ずることなくして、其目的を潔め又た進むことを得るのである。

斯の如く社會的の基督教は社會の形體を變せずして其精神を變じ、至愛至善の神との一致和合を主張す、天國とは夢想の境遇ではない、此精神統一の社會にして、現世に起り未來に發達永續すべき王國を云ふのである。

後篇終

大正四年六月十七日印刷
大正四年六月廿一日發行

(定價金五拾錢)

著者 元田作之進

發行者 福永文之助
東京市京橋區尾張町二丁目十五番地

印刷者 波邊爲藏
東京市京橋區日吉町十番地

發行所 警醒社書店
東京市京橋區尾張町二丁目十五番地
(電話東京一五八七)

不許複製

元田作之進先生著譯書

倫理學(アリストテレス)	定價 一圓六十錢	郵税 十二錢
宇宙の心(プラトーン)	定價 十錢	郵税 二錢
哲學通論(フラトーン)	定價 一圓三十錢	郵税 十二錢
宗教の要素	定價 八錢	郵税 二錢
求道者に與ふる書	定價 十錢	郵税 二錢

短篇說教集

定價 五十錢 郵税 六錢

本書は「短篇講話集」の姉妹篇なり。

コ1196

傳道用の書、、、、、、最も好評のもの

木岡 莞爾氏著	信仰と實驗	郵定	四冊	錢錢
小野村林藏氏著	聖アウガスチンは如何にして 基督教徒となりしか	郵定	二十	錢錢
露無文治氏著	基督教修養一斑	郵定	二十	錢錢
金森通倫氏著	基督教三綱領	郵定	二五	錢錢
宮川經輝氏著	基督と其使命	郵定	四十	錢錢
海老名彈正氏著	吾人が本領の勝利	郵定	二二	錢錢
基督教青年會編	傳道用 聖書文	郵定	二十	錢錢
松原英一氏著	基督教概觀	郵定	四二	錢錢

郵定 郵定 郵定 郵定 郵定 郵定 郵定 郵定
 稅價 稅價 稅價 稅價 稅價 稅價 稅價 稅價
 四二 二十 二二 四十 二五 二十 二十 四冊
 十 錢 五 錢 錢 錢 錢 錢
 錢錢 錢錢 錢錢 錢錢 錢錢 錢錢 錢錢 錢錢

終